

## 【父の心】

お父さんは子育てをどうすればいいのか、生活教育の理論や実践でもまだ蓄積があまりありません。

ルソー、ペスタロッチ、フレーベルら生活教育の先輩は、その時代の母親を批判して新しく「子心を持った乳飲み子」の母親というモデルをつくり、これとの関係で父親を考えたようですが、これが「母親でない大人」による教育、すなわち「教師」モデルの考察に飛んでしまったようです。父親の場合、キリスト教の「父＝神」の影響が強く、ここは批判的に吟味したいところです。日本ではこれが国家神道に影響し、天皇を父とし国民を赤子とした家父長制イデオロギーの影響が現在でも父親像をゆがめているようです。

そう考えていろいろ文献にあたっていると、子どもを亡くした父の記述に出会います（七月号【石川啄木】も）。

文献①では論文末尾に「亡児震子記念」とあり、子どもが亡くなったのに論文を書いている夫を恨ん

## 生活教育 キーワード

だ妻起家がこれを見て夫の心が解ったそうです。論でも、篤胤の神学の進展にかかわって、篤胤が、妻、長男、次男を相次いで亡くした体験があったと補記しています。

文献②は、藤岡が長女光を亡くした「記念」につくったものでした。中学校以来の親友だった西田幾多郎による、追悼文とも読める長い「序」があつて、西田も次女を亡くしたばかりで藤岡に慰め返されたことやドストエフスキーやゲーテが愛児を失った時の言葉も書き記されています。本文で藤岡は、平安朝文学が「親子の愛」をなかなか描けなかった社会制度にふれています。

子どもに生きてほしい。

（研究部・加藤聡二）

### 〈参考文献〉

- ①村岡典嗣「平田篤胤の神学における耶蘇教の影響」、村岡典嗣（前田勉編）『新編日本思想史研究 村岡典嗣論文選』東洋文庫（平凡社）二〇〇四年所収（原著は一九二〇年。一六三ページ）。
- ②藤井紫影、西田幾多郎、藤岡作太郎の序文（藤岡作太郎『國文學史講話』岩波書店、一九四六年所収。また二三三ページ）。